

令和４・５・６年度 小浜市社会教育委員の会 提言書

『青年層のまちづくりへの参画促進について』

令和７年３月

小浜市社会教育委員の会

全体概要

1. はじめに

2. 調査研究の記録

3. 現状

4. 課題

- ① 情報発信の不足と偏り
- ② 青年層の地域活動参加へのハードル
- ③ 活動の硬直化と革新不足

5. 方策

【若い世代へのアプローチ】

- ① ふるさと学習のさらなる充実

【地域の受け入れ態勢の醸成】

- ② 地域の相談・調整役の育成
- ③ コミュニティセンターやまちづくり協議会の役割

6. まとめ（全体総括）

1.はじめに

小浜市社会教育委員の会では、これまで『青年層の地域参加について』、『青年・中高生とまちづくりへの関わりについて』など、本市の社会教育に関するテーマについて市長や市教育委員会に対して提言を行ってきた。

令和3年度には中高生とまちづくりへの関わりや、青年層の地域参加に焦点を当て調査・研究を行い、中学生がまちづくりや地域との繋がりへの感じ方、地域との接点の変化に関する研究を行った。小学生は「子ども会」や親の活動についていく中で地域との関りがあるが、中学生になると、勉強と部活動が生活の大半を占めることとなり、日常的に地域と関わるゆとりがなくなることが挙げられる。高校生になると、成長とともに自分自身をコントロールするようになり地域社会への関心や考えを持つようになる。そのため大人たちは、中学生の発達段階において、地域との接点が途絶えることは「仕方ないこと」と黙認していた面があることが分かった。

しかし、市内の中学2年生を対象としたアンケート結果から、中学生は地域に対し愛着を持ち、地域の活動に関わりたい、誰かに喜ばれることがしたい、役に立ちたい、大人に認められ頼りにされたい等の意見を持ち、地域に対する肯定感も高く、多くの生徒は地域参加に対して前向きであることが認識できた。

さらに、市内の社会教育団体と意見交換会を行った際には、中高生の中には活動に参加することで地域に貢献したいという意識も見られた。

このような意識を有する青年層がまちづくり活動に興味を持ち、さらには参画促進を図るためにはどうしたらよいかを掘り下げて考えるべく、今任期の研究テーマを「青年層のまちづくりへの参画促進について」と定め、意見交換会や研修会に参加するなどして情報を集め、提言書を作成した。

2.調査・研究の記録(実績)

小浜市社会教育委員の会（令和4年度～令和6年度）では、これからの地域の担い手である若者に焦点を当て、「青年層のまちづくりへの参画促進」について下記の（１）～（４）の調査・研究を行った。

(1)大学生と語る会

高校を卒業後、県外の大学に進学した３名（高校生までジュニアリーダーズクラブで活躍していた）と意見交換会を実施した。小浜で活動していた頃感じたことや市外に出ることで新たに体感したことなど、様々な意見を交わした。

(2)青年団体と語る会

実際に小浜市内で活動している３団体（内外海青年団、宮川青年クラブ、KatoBuck）と意見交換会を実施した。これまでの取り組みや今後の展開、地域との関連性について意見を交わした。

(3) 地元 VTuber と語る会

宮川地区で地域の情報や魅力を発信し、まちづくりの活性化に取り組んでいるプロジェクトチームの発起人と意見交換会を実施した。企画を始めるに至った経緯や地域とのかかわり方等の意見を交わした。

(4) 各種研修会や意見交換会など

小浜市社会教育委員の会として参加した、東海北陸研究大会や福井県社会教育委員意見交換会、研修会などでの気づきや学び等をまとめる。

※意見交換会等の内容については下記のとおりまとめる。

3.現状(ヒアリングでの意見等)

(1) 大学生と語る会（令和5年1月5日）

【Uターンに関する意見】

- ・ 学生時代に育った場所は帰ってきたくなくなると思う。
- ・ 県外でスキルを身につけ、生まれ育った町へお返しをしたい。
- ・ いつかはまた小浜に帰ってくるだろうと思いつつ進学で県外へ出ている。
- ・ 福井の環境が自分には合っていると感じる。
- ・ 学生の間でも地元には「帰らない」という考え方の人も多い。
- ・ 地域への関心が高い学生が増えることで地元に戻る選択肢が増えるのではないかと。
- ・ 多くの人が県外に行く理由は様々な機会（仕事、娯楽、出会い等）の豊富さにあると思う。
- ・ 都会に出ると便利なお店が目につき、田舎の不便さを感じる。
- ・ 「小浜が好きでしょ？」や「小浜に帰っておいでよ！」は若者にとってプレッシャーとなっている場合があり、外堀を埋められ、囲い込まれるようで、拒否感を覚えることもある。
- ・ 生まれた場所と生きる場所は必ずしも一致しない。生きる場所として積極的に選択される場所であるようにすること。

【地域の環境等に関する意見】

- ・ 生まれ育った小浜には安心感がある。逆に転居した土地ではどこか不安を感じる。
- ・ 自分たちの活動に対して、小浜は手ごたえを感じられた。地元の人が活動を認知してくれており、声を掛けてくれると実感できる。
- ・ 失敗しても責められるような環境ではなかったため、恐れることなくチャレンジできた。
- ・ 地域の人たちに見守られていると感じる。

- ・都市部と比べ、地域のことを自分事としてとらえやすいと感じる。
- ・他市町を見て感じるのは、地域ビジョンに対して小浜市民は行政任せと感じる。
進学先である神戸は震災のこともあり地域住民のコミュニティがしっかりとしており連携が良くとれていると感じる。
- ・人口が少ない市町でこそ、行政と住民の理想のすり合わせが可能ではないか。
- ・地域のキーマンとなる人の寛容さや優しさが地域の受け入れ力に影響すると考えられる。
- ・若い人が多ければいいというわけではない。
- ・地域との関わりがどれほど持てるかが大切だと思う。

【ふるさと学習に関する意見】

- ・ふるさと学習や地域探究のカリキュラムは自分にとってプラスになっている。
- ・ふるさと学習に力を入れることで地域の魅力を体感し、帰属意識を持ってもらうことが大切ではないか。
- ・ふるさと学習や地域での活動の経験により、郷土への愛着が芽生える。
- ・学校だけでなく、家庭や地域での良い原体験を得る。
- ・授業としては取り組むが、意義を感じていない生徒も多くいる。

【全体を通じて】

今回、意見を交わした3名は学生の頃からジュニアリーダーとして地域と連携した活動をしていた経験があり、地域のことや探究学習に対しても意識が高かった。意見交換の内容から、子どもたちは小学生の頃から「ふるさと学習」で地域のことを自分事として考える機会があり、地域に対して関心や愛着を持っている様に感じた。就職・進学先の選択肢や機会の豊かさを比べると都市部の方が圧倒的に恵まれており、地元を離れる若者は多い。これからの若者にとって地元に住ること、Uターンで戻ってくるといった選択が自己の幸福につながることを望ましい。

また、青年層に限った話ではないが、意欲的に何でもやる2割、言われたらやる6割、何もしない2割の「262の法則」でとらえる時、中間層の6割の意識をできる限りポジティブに寄せ、活力あるまちづくりを推進するにはリーダーシップをとれる「キーマン」の存在が必要不可欠であり、貴重な存在となる。



(左写真：青年と語る会の様子)

(2) 青年団体と語る会（令和5年8月9日）

【地域に対する意見】

- ・ 従来から地区にあった組織の一部として定例的な活動をしている。
- ・ まちづくり協議会と連携して、これまでの流れを汲んで活動をすることが多い。
- ・ 新たに取り組むを行うのであれば地元の了解を得る必要があり、毎年変わる区長に依頼してもまた翌年に…と流れてしまうケースもある。
- ・ 「まちづくり」という語句には面白いというイメージがない。
- ・ 上の世代から「やってくれ」と頼まれ仕方なく続けることもあるが、続かず断ち切れた事例もある。
- ・ 地区の役職や協力依頼などの頼み事や願いは、通例のことだからと言って説明を省かれがちだが、初めての人でも納得できるように十分な説明をしてもらいたい。
- ・ 納得できないまま無理やり任されても、やらされ感や不満感があり、次第に地域を離れていく。
- ・ これまでの経緯・過程・実情もあわせて腹を割った話がしたい。

【若者の参加促進に関する意見】

- ・ 仲の良い人の輪を広げる感覚で活動に参加している。
- ・ 顔見知りが増えることで地域全体の親密度が上がる。
- ・ 活動への参加を無理に勧誘する等はしないこと、興味がある人に来てもらう。
- ・ SNSを活用することで、気軽に情報を手に入れられるように門戸は開けておく。
- ・ 一度活動に参加すると、その後の参加もしなければと感じてしまう。
- ・ 活動には気軽に参加してもらい、次も参加、その次も…といった圧力が無いように配慮をする。本人の意思を一番大切にしておいて参加を決めてもらう。
- ・ 地域で何かと任される人材になることは自己有用感を感じることに繋がる。しかし、目立った一人に役割が集中することで負担が大きくなることが懸念される。

【取り組みに関する意見】

- ・ 若者へのアプローチの入り口として釣り、BBQ、キャンプ、アウトドア体験等の親子でも参加しやすい企画によく人が集まる。
- ・ 学生や若者にとって魅力的な企画を考え実行する。
- ・ 人づくりが大切、人が変わることでまちへ影響を与える。
- ・ 異なる年代や性別、職業など様々な角度から参加しやすいものを企画する。
- ・ 企画している本人が楽しくないと意味がない、まずは楽しむことが大切。
- ・ 活動をしていると完全な外野からケチをつけられることがある。
- ・ 支援はしないのに、口だけ出してくる人もいる。

【全体を通じて】

今回の参加者は、従来からの活動を継承する団体、既存の団体とは違った新たな活動で地域活性化を図る団体等、それぞれ性質の違う団体との意見交換会となった。いずれの団体も取り組みの根底にあるのは「面白い・楽しい」といった感情であり、何事も「やってみよう」という行動力を感じられた。イベントに参加する若者は運営側のモチベーションの機微を察知しており、楽しんで企画しているのか、嫌々こなしているのか等を感じ取っている。人を集め楽しんでもらうためには、運営側の人間が一番に楽しんでいることが大切となる。楽しい雰囲気は周囲へ伝播し、魅力的な地域に近づくと考える。

全国的な人口減少の中で昔ながらの形式的な行事では存続自体が負担となることも多く、時代に合った方法に変容させ、人が集まりやすくなる工夫が必要となる。

青年層が新たなアイデアを提案し、形になるまでの流れをサポートするためには、コミュニティセンターや地区まちづくり協議会のバックアップが必要不可欠となる。要点のアドバイスや補助制度の紹介等、地域の若者を支援する体制を固めておくによりよい「まちづくり」につながると考えられる。



(上写真：青年団体と語る会の様子)

(3) 宮川地区のVTuber 宮里ひまわりの運営者（30代女性）と意見交換会（令和6年4月15日）

【地域の魅力について】

- ・ 地元の人には当たり前を感じていることでも、違う環境から見ればとても価値のあるものばかり。
- ・ 魅力として発見できるかどうかの視野・視点が重要。
- ・ SNSを通じ情報発信をすることで地域のファンを増やし、これまでなかった交流が生まれる。
- ・ 進学や就職で地元を離れ生活することで、改めて故郷の魅力に気づくパターンもある。

【社会環境の変化について】

- ・ 現代の青年層が子どものころは、地域の大人が活発でなんでもしてくれていた記憶がある。
準備・後片付けなどすべてを大人たちが率先してやってくれていたため、お客さんとしての関わり方しかしてこなかった。このことから若者は何もしなくても誰かがやってくれていたという感覚を持っており、どこかお客さんとしての意識を持っているように感じる。

- ・自分が主体となって企画・実行してきた経験が乏しい。
- ・他人任せにしてもなにかあった経験があり、その意識を変えるのは難しい。
- ・若者の地域参画という課題に向けた一つの方法としては、運営側の立ち位置に入り少しずつ動いてもらい、主体性・計画性を持った人を育てていくことが重要である。

【若者の考え方について】

- ・やる、やらない、を決めるのは自身にとってそれが有益か否か。
- ・何事も傍観者でいることが楽だと思える人が多い。
- ・やる人を増やすには、その人が本気になれる役割を与え、本人事として取り組むように促す。
- ・自分が主人公であると感じてもらうことが大切。
- ・目立たないようにしたい人が多数派。
- ・誰にでも役割があり、それを自覚できるように促す。
- ・自己有用感を大切にする。

【全体を通じて】

青年層の地域離れと言われているが、地域との接点が少なくなっている現状で突然、役割を振られても困惑する。しかし、いつまでもお客さん扱いでは状況は改善しない。

まずは、既存の組織に少しずつでも若者が参加し、意見を述べ、反映する。といった経験が必要となる。経験や地域の人とのつながりが確立されてから運営を移譲するのが理想的。

門戸を開き、気軽に楽しく参加できるように地域として共通理解をすること。
コミュニティセンター、まちづくり協議会においても同じように寛容であることを心掛ける。

(4) 意見交換会や各種研修会などから

【若者の参加を増やすには】

- ・若者は「面白そう」「気軽」に集まる傾向がある。
- ・実際に「楽しい」、が良い結果につながる。
- ・大人、若者の立場ではなく同じ目線で関わること。
- ・SNS を上手く活用することで若者に情報を届ける。
- ・自己の存在意義について考える若者は増えてきている。
- ・自己有用感は大きなテーマとなる。

【地域の大人の心構え】

- ・年配者が上から目線の指導「教えてあげる、指導してあげる」といったスタンスはNG。
- ・若者に対しては、「教育」ではなく「気づき」「開発」を促すよう意識する。
- ・出る杭を応援しよう。
- ・若者、大人と分類せずに同じ人間であり対等な目線で関わる。

- ・若い人の挑戦を否定ではなく、見守り応援し認める。
- ・一緒になって本気で取り組んでいる人の話であれば、厳しい内容でも受け入れられる。
- ・各所で起こる自発性への「発火点」を見逃さず、次につなげる感度を持つ。
- ・コミュニティを「財」としてとらえ、感じることができる資質や感度を大切にする。
- ・若者に対し、地域の「課題」や「財（祭、資源、文化）」を物語的に提供し、共に考え行動することで自発性磨きを行う。そのためには大人側が地域に対する説明力を高めておく必要がある。
- ・地域の中で共通理解が進むことで、緩やかなコミュニティの中でもつながりを持てる。
- ・地域との対話が価値のある事だと認識してもらう。
- ・学校教育と社会教育がお互いの取り組みへの理解を持ち、繋がりを持つ
- ・小-中-高でのそれぞれの活動の積み重ねや地域での学びなど、ふるさと学習から得たスキルをアウトプットできる仕組みを整える。

4.課題

① 情報発信の不足と偏り

若者が地域に対して愛着を持っていることはアンケートやヒアリングの結果から見る事ができた。これは、小学校から高校まで継続して行っている「ふるさと学習」の効果であると考えられる。しかし、進学や就職にて県外を経験すると、これまで育ってきた環境と比較し、より自分に合った生活の場所を選択するようになる。若者にとって魅力的な取り組みであっても、多くの場合は情報を届けたい所へ届いていない。どれだけ良い企画をしても存在を知られていなければ人は集まらず活性化につながることはない。できるだけ簡単に情報が手に入る SNS やインターネットを上手く活用しさらなる魅力発信について検討する必要がある。

② 若者の地域活動参加へのハードル

近年の若者は「意味」を重視する傾向にあるため、「前例踏襲」「充て職」といった押しつけには拒否感を持つ。

生まれ育った地域に貢献したいと感じている若者は多い中で、一度イベントへ参加するとその後の運営や活動に巻き込まれ、参加しなければならない雰囲気、同調圧力を感じる。新規での参加者を誘いづらい。また、女性の参加者が少ないため、やってみたいという気持ちはあっても参加しづらい。

また、学生や就職している青少年が参加できる時間帯は限定的であるため、実際に参加したくてもできないという実情もある。

③ 活動の硬直化と革新不足

多くの地域活動は長年にわたって運営されてきた体制があり、決定権を持つ層が高齢化しているケースが多い。昔ながらの方法が重視され新しいアイデアや若者の意見が取り入れられにくい

環境が存在する。このため、青少年にとって「古い体制」に縛られた活動は魅力的には映らず、参加へのモチベーション低下につながる。

昔ながらの体制では、形式が重視され、変化に対応する柔軟な活動が少ない傾向にある。

また、若者にリーダーシップや意思決定の役割を与えることが少なく、青少年が活動に参加しても意見が反映されにくく、主体性を発揮できない状況が続いている。結果として、活動に対して消極的になり、関心を失っていくことが懸念される。

5.方策

【若い世代へのアプローチ】

① ふるさと学習のさらなる充実

本市で小学校から高校まで継続して取り組まれている、ふるさと学習や探究学習は児童・生徒によって温度差はあるものの、地域の魅力発見や人との繋がりが生まれる機会となり、郷土への愛着の底上げに寄与している。

ふるさと・探求学習に関わる地域の大人を増やし、学習内容を市全体で共有することで、その効果を市全体に波及させていく。

【地域の受け入れ態勢の醸成】

② 地域の相談役・調整役の育成

地域活動へ若者に参加してもらうためには、日ごろからの関係性が重要である。

気軽に声を掛けられる関係を作ること、抵抗なく活動に参加してくれるようになり、活動への参加自体が楽しいと感じてもらえる。また、参加してもらうだけでなく、企画・準備の段階から携わることで達成感や自己有用感を得られる。

また、若者が率先して活動を企画するような際は、地域の大人は相談役として支援することはもちろん、地域への説明を手伝う等、間に入りクッションとしての役割を担う。

③ コミュニティセンターやまちづくり協議会が担う役割

団体の運営にかかる事務作業の手伝いや、財政的負担の軽減をするなど持続的な活動ができるような支援をきめ細かにいき、多様な方面から参加者を募る環境を整える必要がある。

地域の実情に合わせ柔軟に対応ができるのは、各地区コミュニティセンターやまちづくり協議会の強みである。若者の意見や思いを受信しやすい環境に工夫し、それぞれの形にあった特色のある柔軟で寛容な支援を行う必要がある。また、地域の大人としては物語的理解と説明ができる力、対話が行える力を求められる。

6 全体まとめ

社会教育委員の会としては、青年層のまちづくりへの参画促進とかかわりについて大学生、青年団体等と対話をし、地域活動への参加に意欲的な意見を聞くことができた。大学生については、進学し県外の環境を体験していく中で、故郷である小浜の性質が自分に合っていると感じ、将来的には帰ってくるだろうと考える人もおり、肯定的にとらえている意見を聞くことができた。青年団体については、興味・関心のある内容、子育て世代が楽しめる企画を実施するなど、地域に活気をもたらす取り組みを考え行動している団体もあり、今後も多くの人々が地域・社会と関るきっかけができていていると感じる。

若者にさらに地域参画する意識を持ってもらうためには、親、祖父母をはじめ地域の大人たちとの関係性はもちろんのこと、当事者として主体性を持ち企画段階から一緒に創りあげる雰囲気づくりが重要である。若者が地域のことを考え、アイデアを出し、自発的な活動を行う際は地域からの支援が必要不可欠である。地域の大人たちが調整役を担いコーディネーターのような役割をすることで良い人材が育つと考えられる。

また、地域で受け継がれている「祭」も、世代間のつながりを生む可能性を持つ。子どもから青壮年、お年寄りまで多くの住民が協力し、準備・運営、稽古や本番等多くの時間を共有することで、世代を超えた交流が生まれ、地域コミュニティの絆が深まることが期待でき、地域の伝統を継承しつつ、青年層が地域活動に参画するための効果的な架け橋となり得ると考える。

これまで若者は、「地域に住んでいながら地域離れの傾向にある」と思われがちであったが、実際には、声をかけてもらいたい、地域活動に参加したい、企画の発案や行動に期待をしてほしい、と考える若者がいることが確認できた。青年層が地域に親しみをもち、従来からの活動への参加や、地域の活性化に関するアイデアを形にすることなど、地域参画の準備はできていると考えてよいと思われる。

社会教育委員個々としては、学生・若者の地域参画促進を市やコミュニティセンターや各地区まちづくり協議会、各種団体などに働きかけを行い、それぞれをつなぐ活動を行うとともに、各地区の状況を把握したうえでコミュニティセンター等に出向いて懇談を行い、他地区の事例を伝える等の橋渡し活動をし、地域活動を行う若者に対しての側面支援を行う。若者が帰ってくるための土壌・受け皿づくりは地域だけでなく市全体としての取り組みが必要不可欠であることから、自らがそれぞれ市民の一人として、市内横断的に関わる活動をしていくことも大切である。

これらの方策はすぐに効果は表れないかもしれないが、地域の大人たちが前向きに取り組む続けることで、若者たちがやがて青年や壮年となり、また次の世代へと繋がりが広まっていく。年数の積み重ねが大切であり、一年一年の微々たる進展を期待していくべきである。今、まず取り組むべきことは、生まれ育った地域の中で、若者に対しなにげない会話や挨拶などを心がけ、声を掛けやすい関係性を築くことである。些細なことでも日常化するうちに、対話の機会に発展し相互理解の深化に繋がるのではないかと思う。年齢層を超えて、地域住民すべてのつながりを深める意識が必要なのだと、今回の調査研究でかかわりの持てた青年層から教わったものと受け止めている。

小浜市社会教育委員の会 名簿

(敬称略)

No	氏 名	役職	備考
1	岡 登志郎	議長	
2	工藤 ふさ子	副議長	
3	宮本 保一	副議長	
4	岩崎 好信		
5	赤坂 修代		
6	松井 直美		
7	山下 徹		